

# 特集 語りつごう平和への願い～終戦から80年～

8月15日は終戦記念日です。戦争という悲劇を繰り返さないよう、平和の尊さについて改めて考えてみましょう。  
問合せ先 本広報室(TEL22182)

終戦から80年。戦争の記憶の風化を防ぎ、未来に伝えようと、県立渋川高等学校が、その記憶の継承と発信に取り組みました。彼らは、戦時中に特攻兵器「回天」に搭乗し、戦死した同校OB・都所静世さんのことを取り上げ、6月に行われた文化祭「榛嶺祭」で発表しました。戦争の悲惨さと、その教訓をどのように伝えようとしたのか、その思いを聞きました。

## 同世代だった人が回天に

「私たちが記録を守る理由」

Q:文化祭の展示で都所さんを  
取り上げようと思った経緯は

齋藤さん 父親が旧制渋川中学校(現県立渋川高校)で都所さんと同年代だったという顧問の高橋先生に、都所さんのことを聞き、その後自分の父からも同じ話を聞いた。さらに出身地が自分と同じだと知り、運命だと思った。社会部を巻き込み、調べてみたいと思った。  
Q:展示発表に当たって心がけた  
ことや伝えたかったことは

齋藤さん 資料はどれも貴重なものだったため、細心の注意を払って扱った。都所さんのような人が自分たちの学校にもいたということとを伝え、忘れられていくことを食い止めたかった。  
矢島さん 戦時中に何があったのか、地元群馬県に関連することでも知られていないことがある。県内で戦争体験を語り継ぐことができる人も減っている。だからこそ、「自分たちが継承しなければいけない」ということを伝えたいと思った。



矢島 啓太 さん  
(部長・3年)

Q:資料の中で特に印象的だったものは

齋藤さん 都所さんが、自分が乗る回天の機体に、現在、渋川高校の文化祭や同窓会館の名称として親しまれている「榛嶺」という名前をつけたことが分かる短冊が衝撃的だった。郷土愛が強かったのだと確信し、自分の学校の先輩が郷土に抱いていた思いの強さを、多くの人に知ってほしいと思った。  
矢島さん 調べると、都所さんは複雑な家族関係で育ったことが分かる。その中で、自分を支えた義姉への感謝が読み取れる遺書が印象的だった。つづられた「もう一度お姉さんに会いたい」という言葉を見て、そんな思いがあっても戦争に行かなければならなかったのだと思うと、切なくなった。

## 若い世代の意識

「戦争の記憶の継承について」

Q:戦争を知らない世代が、戦争を  
知る方法

齋藤さん 戦争に関心を持つことだと思ふ。しかし、戦争について知る機会も少なくなっていると思う。関心を持つ前に、情報が目に入らない。もっと学校の授業や、テレビ番組、ネットなどで知る機会が増えるといいと思う。  
矢島さん 自分で調べたり資料館に足を運ぶことが大事だと思うが、自分の中で印象に残っているのは、祖母から聞いた空襲の話だったの。身近に話してくれる人がいれば聞いてみるのもいいと思う。また、地域のイベントとして戦争を知る場があったらいいなと思う。



Q:終戦80年という節目について、  
どう感じていますか

齋藤さん 大きな節目だと感じる。これまで戦争を語ってくれた人たちが、だんだんと活動できなくなり、生きた声が聞けなくなる。これからは「知っている世代」と「知らない世代」の間に、はつきりと境界線ができてしまうと思う。



齋藤 成 さん(2年)

Q:戦争を防ぐために自分たちが  
できることは何だと思いますか

齋藤さん 皆が戦争を望まなければ、政治も戦争を選ばないと思うが、無関心な人が増えると、戦争を肯定する一部の声が大きくなる。過去の記憶に関心を持ち、平和を大切にしている価値観を、今の社会に合わせて育てていくことが大切だと思う。  
矢島さん 自分も齋藤さんと同じ考えを持っている。世界中の人が平和を願ってれば、きっと80年前のような戦争は繰り返されないと思う。貧困が原因で戦争が起これることもある。国や地域の枠を超えて、協力していくことが必要だと考えている。



旧制渋川中学校(現県立渋川高校)OB・都所静世さんとその遺品

## 地域に残る戦争の足跡

渋川市周辺の太平洋戦争関連年表(主に被害・影響に関するもの)

年月日	出来事	内容
昭和16年(1941年)	太平洋戦争開戦	戦争の激化に伴い、物資の消耗が急激に進む
昭和19年(1944年)	学童集団疎開	東京都王子区(現在の北区)の学童が、渋川市域の決められた寺に分宿した
昭和20年(1945年)7月30日	渋川市域に米軍機来襲	米軍機による空襲で、工場や渋川駅、大正橋などをはじめとする市街地が被害を受けた
昭和20年(1945年)8月5日	前橋空襲	近隣都市前橋が大規模空襲に遭い、市域南部にも焼夷弾が落とされた。周辺地域にも緊張が走った
昭和20年(1945年)8月15日	終戦	玉音放送が各市町村で流れた。人心の動揺、生活物資の欠乏などへの対応が始まる

(参考文献)群馬県史、渋川市誌、敷島村誌、まんが渋川の歴史

「今回の戦争でもっとも恐ろしかったことは空襲であった」

これは、敷島村(現赤城町)の村誌に残された一文です。書物に残るこれら実際の空襲の記録は、混乱のなかで人々がようやく残した、貴重な声でした。

戦争の記憶は、少しずつ遠ざかりつつあります。それでもなお、若者たちは学び、過去を知る人は語り、映像は問いかけます。

戦争を知らない世代が大半となった時代だからこそ、自ら関心をもち、記録に触れ、考えることの重要性は、一層高まっています。それぞれの形で平和を願い、記憶を未来へどのように受け継いでいくことができるか。それがこれからの大きな課題です。

## 「回天」とは

魚雷を改造した特攻兵器で、搭乗員が乗り込み、目標に体当たりすることで破壊力を発揮しました。出撃後の帰還は想定されておらず、20歳前後の多くの若者が、開発中の事故や出撃などにより、命を落としました。

回天は、その性質上、搭乗員の犠牲が非常に大きかったことから、戦争の悲惨さを象徴する兵器の一つとして語り継がれています。

## 市の取り組み〈戦後80年 平和映画上映会〉

広島・長崎の14人の被爆者と、原爆投下に関与したアメリカ人4人の証言を軸に、ヒロシマ・ナガサキの真実を描いたドキュメンタリー映画(一部字幕があります)を上映します。

とき 8月15日(金)午後2時～3時30分

※開場は午後1時30分  
ところ 金島ふれあいセンター  
上映作品 ヒロシマナガサキ WHITE LIGHT / BLACK RAIN(86分)  
定員 200人(先着順)  
ホームページID 12386  
問合せ先 市民協働推進課(TEL22463)

